

男性（50代）禁煙年齢・50代

私が初めてタバコを吸ったのは、いつだっただろう。もうとっくに時効だと思うので告白すると、四十年近く前、たぶん中学生の頃である。

テーブルに置き忘れた父のハイライトをみつけて、何本か失敬し、いたずら心で吸ってみた記憶がある。その時は、タバコがうまいとは勿論思わなかったが、禁断の味というのは、ある種の魔力を持っているものなのだ。

高校三年の時には、こっそりハイライトを買って、わざわざ村はずれの桑畑まで出かけ、人に隠れて何本か立て続けに吸っているうちに、ニコチン中毒で気持ち悪くなり、翌日までご飯も食べられなくなるという、バカな経験もした。

但し、ここで言い訳をさせて頂くと、私は決して不良だったわけではない。ただ漠然と大人社会への憧憬があって、ちょっとばかり背伸びをしてみたかっただけなのである。もっとも、例えば覚醒剤などに安易に手を出してしまう人も、動機は私の隠れタバコと似たようなものなのかも知れないのだから、やはり問題なのだろうけれど……。

高校を卒業して東京に来てからは、毎日の生活にタバコは不可欠のものになった。アルバイトをしながら大学へ通っていた時代は、どれほど経済的に困窮しても、毎月二枚のLPレコードの購入とタバコだけは、どうしてもやめられなかった。

アパートへ帰るのはいつも夜中だったが、寝る前に一服しようとして、マッチがないことに気付くことがある。上着のポケットや、机の引き出しの中などを必死で探すのだが、一本もないのだ。台所のガスコンロを使うという手も考えられるが、私の住んでいたアパートのガスコンロは、自動点火式ではなく、マッチでつける旧式のもので、それもできない。マッチはこんな夜中には手に入らないのだから、諦めて寝てしまえば良いのだが、吸えないと思うと余計に吸いたくなり、イライラして眠れない。

そしてその結果、私が考えついたのは、ヘアドライヤーを使う方法だった。ヘアドライヤーのスイッチを入れて吸気口を塞ぐと、中のニクロム線が赤熱するので、吹出口の格子の間からタバコの先端を突っ込んでスパSPAやるのである。そこまでしてでも、私にとってタバコは吸わずにいられないものだった。

結婚して娘が産まれた時に、一度禁煙を試みたことがあるが、長くは続かなかった。巷では嫌煙権なるものが叫ばれ始め、やがて駅のホームが終日禁煙になったり、レストランにも禁煙席が設けられたりして、喫煙者がどんどん肩身の狭い思いをしなければならない世の中になり、家では所謂「ホテル族」になったりもしたが、それでもタバコはやめられなかった。これまで続けて来た生活の一部を失うようで、名残惜しく、それに、例えば仕事が一段落して、ちよっと一息つく時の一服――。深く煙を吸い込んでから、フーッと吐き出す時の、あの一瞬の安楽は、捨て去り難いものに思われた。

私が本気で禁煙したのは、二年ほど前、妻が肺癌になった時だった。妻は、三鷹市の健康診断で、胸部X線写真から、左肺の上部に小さな影が写っているのが発見され、直ちに杏林大学病院で手術を受けた。

妻が肺癌になったのは、当然ながら、私の喫煙が原因なのかも知れないと思わざるを得なかった。手術が始まって五時間ばかり後、私は主治医の先生に呼ばれ、妻の体内から摘出された肺（左上葉）を見せられたのだが、その表面には、黒いススのようなものが、びっしりとこびり付いていた。先生は、本人は喫煙していないのに、副流煙でこれほど汚れるとは考えにくいとおっしゃったが、それではいったい、何のススなのだろうか。自動車の排ガスの煤煙なのか。そんなことを考えながら、「オレはヘビー・スモーカーではなかったし、吸っているタバコも軽いものばかりだったのだから、きっとオレの喫煙のせいではないのだ。」と、少しばかり心が軽くなる自分が情けなかった。しかし、それでは何が原因か、と考えると、仮に大気汚染とか遺伝的なものだとしても、私が喫煙していなかったら、妻は肺癌にならなかったかも知れないのだ。なぜもっと前に、タバコをやめなかったのか、と悔やまずには居られなかった。だから、妻が退院してからも、私がタバコを吸い続けることは、自分の気持ちとして、もはや許せない。それぐらいの自律心は持っているつもりだった。

数ヶ月後、気が付いたら完全にタバコと訣別した自分がいた。あれから二年。幸い、妻は癌の転移も再発もなく、健康に過ごしている。